

〔資 料〕

# 日本聖公会聖愛教会（世田谷区）の建築史 ならびに復元的考察

堀内正昭・武藤茉莉

## はじめに

例えば、小田急小田原線の成城学園前で下車し、南口から出て東に向う。途中仙川を渡ってさらに東に歩を進めると、住宅街のなかに白ペンキ塗りの下見板をもつ教会堂が現れる。この建物が本稿で考察対象にする日本聖公会聖愛教会で、場所は砧8丁目となる（図1）。

世田谷区では区内の歴史的建造物を対象に、将来の文化財の候補となる建物をリスト化している。本教会もその一環として調査を行うこととなり、本学環境デザイン学科堀内研究室が担当することになった。

2009年は聖愛教会の創設120周年に当たり、教会堂の悉皆調査に対して、教会側の関心は大変高く、見学や資料の提供などに便宜を図っていただけた。

本教会堂については、近年耐震診断が行われたため、現状についての詳細な図面が存在していた。そこで堀内研究室では、以下の諸項目に力点を置いた調査を実施することとした。

- ① 現在の砧の地に教会が設立されてから今日までの教会堂の建築史を明らかにする。
- ② そのための関連資料を収集する。
- ③ 資料の分析を通して、創建時の教会堂の復元考察を試みる。
- ④ 教会堂の増改築、改修等の工事履歴を洗い出して、現在の保存状態を検討する。

筆者（堀内）はつねづね建物の調査が大学の授業の一環として成立し、それが学習成果に反映され、結果的に単位換算される方法を模索している。ただ、その難しさは大学の授業に合わせて前期あるいは後期に、そのような物件が都合よく用意できるかという不安定さにあった。今回の調査依頼は2009年度前にあったため、筆者担当の以下の開講科目を充てることにした。

大学院環境デザイン研究専攻開設科目「建築史研究IB」（履修者2名）

同生活文化研究専攻開設科目「文化財研究（文化）ID」（履修者1名）

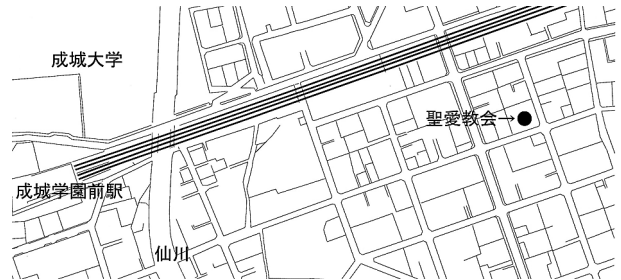


図1 聖愛教会の位置

## □調査実施日

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 2009年5月21日 | 教会堂の見学ならびに写真撮影     |
| 同6月4日      | 日本聖公会東京地区事務所にて資料収集 |
| 同8月6日      | 教会堂の再訪             |
| 同8月18日     | 教会堂にて中間報告会         |
| 同8月27日     | 立教小学校訪問            |
| 2010年2月6日  | 聖愛教会にて、調査報告会       |
| 同2月23日     | 建物追加調査             |

## □調査メンバー（所属学科学年は調査時のもの）

- 大学院環境デザイン研究専攻1年（堀内研究室）  
片倉 真里  
武藤 茉莉  
大学院生活文化研究専攻1年  
木村 知世

## □調査協力者（堀内研究室）

- 生活科学部生活環境学科3年  
石川 真子  
館野 仁美

## 1. 現在の教会堂の概要

聖愛教会の敷地は十字路に面していて、建物の南面と東面のほか北面が望める。敷地の南にアプローチをとり、入ってすぐ左手（西側）に2階建ての住宅である牧師館が、敷地の北側を教会堂が占める（図2、3）。

この教会堂南面の左手（西側）に玄関が張り出しているため、平面はL字形となる（図4）。西端が2階建てであるほかは平屋である。規模は桁行が約25.3m、梁間が約13.6メートルで、床面積は約288m<sup>2</sup>（約87坪）である。

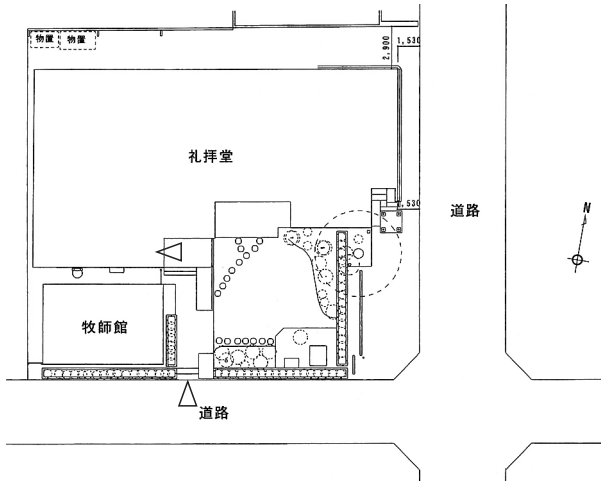


図2 聖愛教会の配置図

本教会堂は、南面の左半分、西面全体、そして北面の西端がモルタル仕上げになっているほかは、下見板張りで、現在は白ペンキで塗装されている。南面の右手（東）には鐘楼がアクセントを添え、東面の中央に黒色に塗られた豎板がコントラストを付けているほかは、下見板が意匠上の大きな特徴となっている。

堂内については、西側に便所、和室6畳、厨房を壁で仕切る以外は、玄関、それに続く集会室、そして礼拝室は可動間仕切りで開閉される。東側には礼拝室から一段上がった祭壇（祭壇自体は2段）があり、その祭壇の左右（南北）にベストリー（聖具室）が配置される。天井は十字架を想起させる造作がなされ、間接照明が穏やかに堂内を照らす（図5）。



図3 聖愛教会外観（南面）写真左に牧師館が見える



図5 堂内（聖壇方向を見る）

なお、小屋組にはキングポストトラス（真東小屋組）が用いられている。

## 2. 教会堂の沿革史<sup>1)</sup>

現在の聖愛教会の前身は博愛教会で、1889（明治22）年に麹町に創設された。このときから数えて2009年が創立120周年となる。博愛教会から現在への名称変更は1901

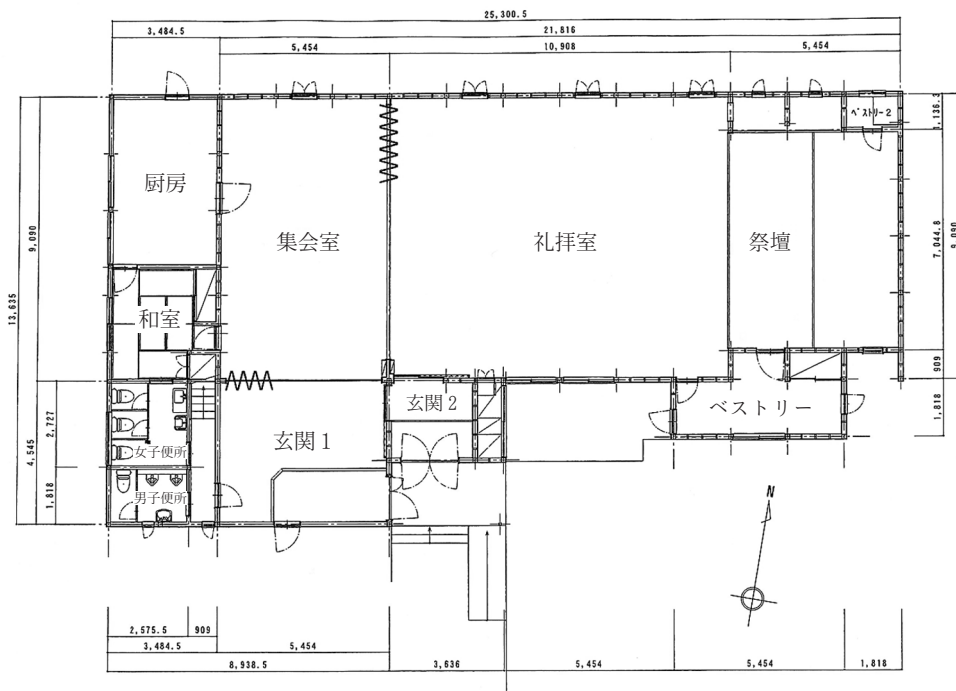


図4 現状の平面図

(明治34)年になされている。1934(昭和9)年に麴町から幡ヶ谷へ移転し、その後1945年に戦災で建物を焼失している。3年後の1948年に教会堂の再建が決定され、その際、聖愛教会は現在の砧に移転した。この当時から物語る以下のような記述がある<sup>2)</sup>。

会堂の再建のみで土地買収を含め約百万円を要し五十四万円はアメリカ、ミッションより援助、二十五万円は幡ヶ谷の土地四百二十坪を売却して得、他は寄附も仰ぐこととした。廿四年、祖師ヶ谷砧町に二百坪を十二万円で買収することが出来た。

1949年6月に定礎式が行われ、工事は順調に進み7月中には終了し、同年11月に献堂式が行われている。本稿では、この1949年の教会堂を創建時の建物と呼称することにする。

その後の教会堂の増改築については、1960年6月に聖堂の両側をそれぞれ4坪ずつ計8坪の増築を行ったとされるが、それがどの部分なのかは不明である。創建時から数えて15年後の1964年、雨漏りが激しく、建て替えが望まれる事態となっていた。

この建設に関しては、立教小学校との関わりが大きい。その頃信徒の一人であった立教小学校校長酒向誠氏が、1948年に建てられた同校舎の改築を決意したという。その校舎は立派な木材を使用しており耐久力も十分であることが判明したため、聖愛教会の委員会に諮り、校長室ごと立教学院から無償で譲り受けたとされる。そのため当初工期は数年の計画だったが、約4カ月という短期間で教会堂の新築がなった<sup>3)</sup>。このときの事情を物語る以下の記述がある<sup>4)</sup>。

たまたま卅九年春、立教小学校校長酒向誠氏より、校舎改築の為不用となった同校事務室及び校長室の一部を、教会へ無償で提供しようとの提言があり、委員会に於ても一同感謝して受けることになり、同校の父兄で建築士の連沼氏の御好意により、三百万円で建築を請負われ、鈴木正雄建築士及び竹之内司祭の設計により、卅九年八月八日竣功した。八月十六日聖別式挙行、後藤主教司式、巽・竹之内両司祭列席のもと、ハンマー司祭の説教が行われた。

その後の改築としては、1980年の鐘楼の追加工事が挙げられる。またそれと同時に堂内の集会室、廊下、台所が改修されている。さらに1987年、創立100周年の記念行事として増改築が実施されている。それは、聖堂、集会室、聖堂玄関各所の増築及び、旧家屋の屋根裏を物置、図書収納庫、事務ワーク室へ改築することを目的としていたが、

教会を明るく開かれた場にする狙いも含んでいた。同年4月19日に工事が開始され、10月4日に完了している。

工費は予算1600万円に対し、追加工費303万円と音響工事費55万5千円等が上乗せされ、最終的に1960万5千円になったとされる。

以下の各節では、1949年の創建時の教会堂の復元、そして現在の教会堂の母体となる1964年当時の建物について詳細に検討していく。

### 3. 創建時の教会堂の復元的考察(1949年)

聖愛教会は1949(昭和24)年に現在の砧に移ったことをすでに述べたが、この創建時の教会堂の姿を知る資料があったので、ここで復元的考察を行ってみたい。

#### 3-1 資料ならびに当初図面について

本考察に使用した資料は以下の通りである。

・「聖愛教会復興建築設計図」(縦51cm, 横69cm)

1枚の青図で、配置図を兼ねた平面図、東側ならびに北側立面図、断面図(いずれも縮尺1/100)、矩計詳細図(1/20)、見取り図(縮尺なし)が書き込まれている。設計は株式会社市毛工務店設計部と記載。

・「市毛工務店見積書」(1949年4月7日)

以上、2点の建築関連資料は、港区芝公園にある日本聖公会東京地区事務所に保存されていた。

・「昭和25年頃の聖愛教会全景」、「昭和25年聖堂聖別」、「昭和25年日曜学校の集い」と題された3枚の写真(『百年史』に掲載)

・「教会堂東側正面」(1枚)、「教会堂塔屋の南側部分」(1枚)、「堂内西側の内陣」(3枚)(全て写真 聖愛教会所蔵)

上記の設計図には年代の記載はないが、同じ市毛工務店が1949年に見積書を作成していることから、創建時の教会の図面と考えてよい。以下、同設計図を詳しく分析してみよう(図6, 7)。

図面は尺寸で設計され、教会堂15坪、牧師館18坪という記載がある。教会堂の東に玄関があり、玄関口には両引き戸がつく。玄関ホール(モルタル仕上げの土間)から両開きの扉を介して身廊を大きく取り、南北に袖廊を張り出させる。南袖廊はオルガン室であり、北袖廊はベストリー(聖具室)に供される。そして、西側奥に身廊から5寸(約15cm)高くした矩形の内陣(聖壇)を設けている。その結果、平面図は全体に十字架状の形となる。なお、南袖廊にはドアがあり、牧師館に通じるようになっている。

身廊に「五四人」という記載があり、収容人数かと思われる。ただ、長椅子(計12ある)の幅が約1.6mなので、3

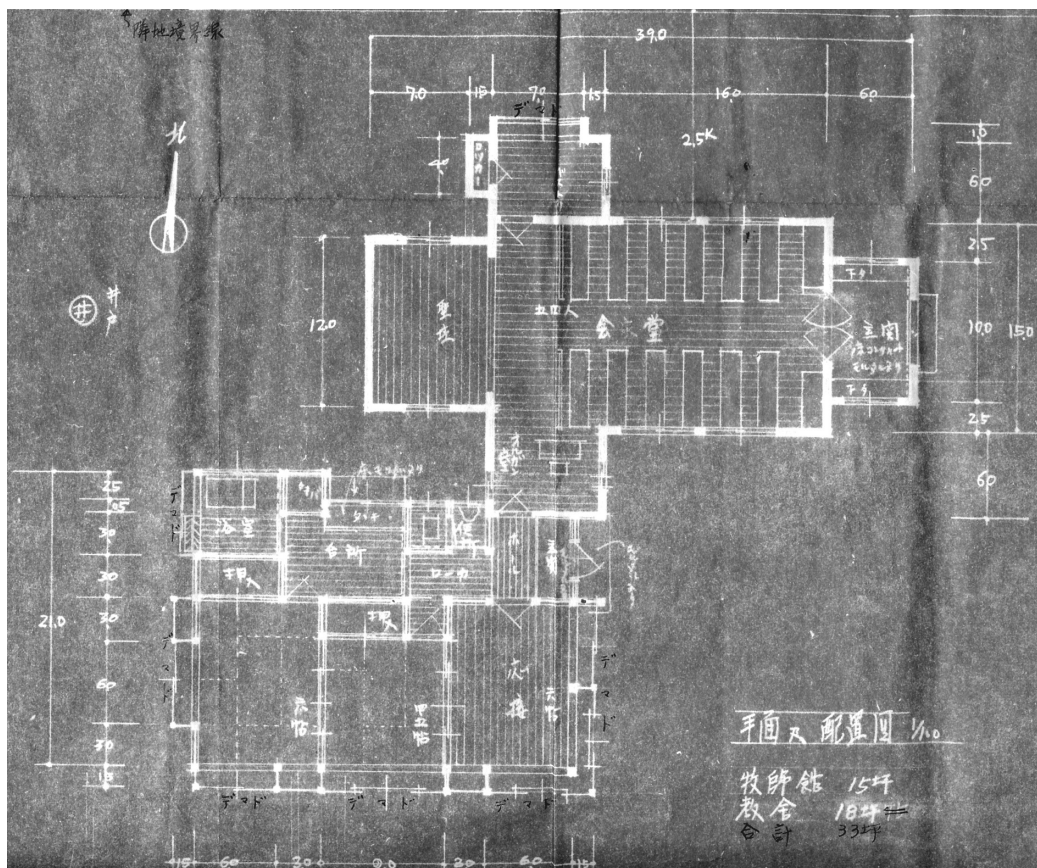


図6 創建時の平面図(部分)

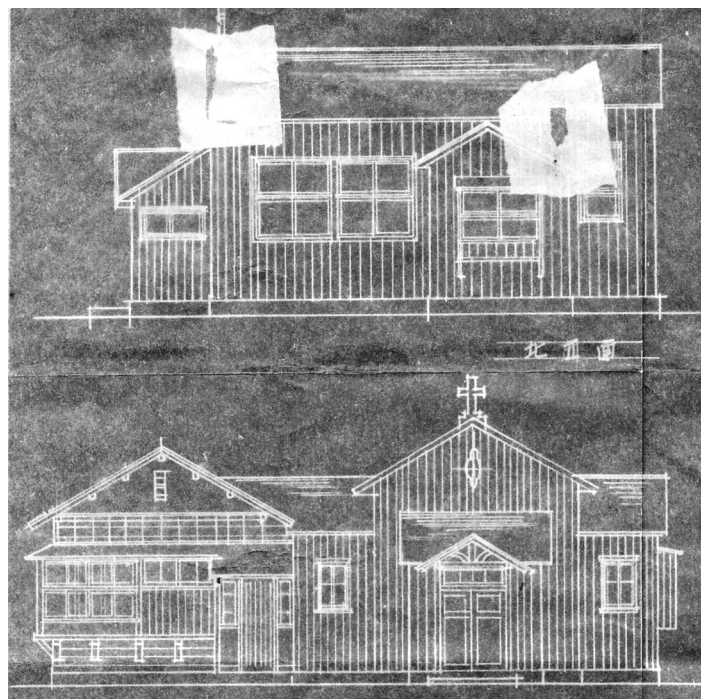


図7 同・立面図(部分)

人掛けにすると 36 人となる。54 人という数字は、内陣（聖壇）を含んで算出したのかもしれない。

他方、外観については身廊ならびに内陣部の上を切妻造の屋根とし、袖廊部上は同じく小振りの切妻屋根で、玄関部には片流れの屋根をかけている。外壁には縦線の目地があることから、縦羽目板張りの仕上げが想定されていたことになる。なお、矩形詳細図から、小屋組はキングポストトラス（真東小屋組）であることがわかる。

### 3-2 写真との照合

では、創建時の様子を伝える市毛工務店による設計図は、そのまま実施されたと考えてよいだろうか。

1950 年頃に撮影された聖愛教会の外観とこの設計図を照合すると、写真に見られる高い尖塔をもつ塔屋部分が図面にはない（図 8）。この塔屋部分は縦羽目板張りであるが、それ以外の外壁は板を横に重ねた下見板張りとなっている。



図 8 創建時の教会堂の外観

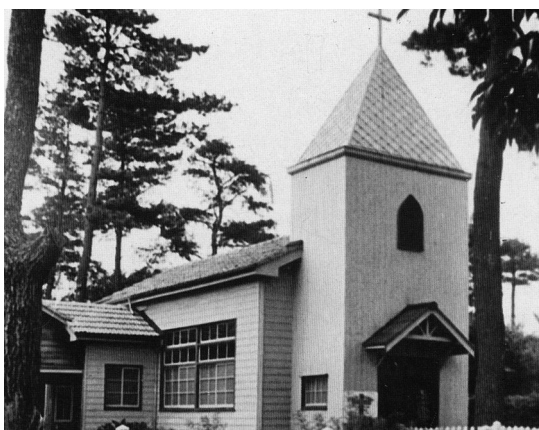


図 9 同・塔屋を南側から見た外観



図 10 堂内の祭壇



図 11 同

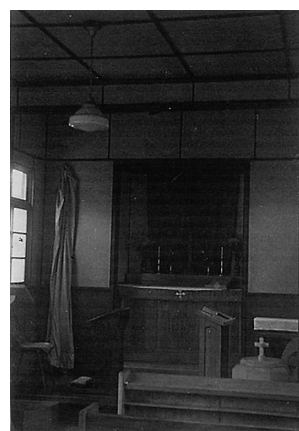


図 12 同

設計図はすべて縦羽目板張りであった。従って、同設計図は復元考察をする際にそのまま採用できないことになる。

確かに、設計図と写真で見る玄関部はその姿を異にするが、身廊部の前に張り出した玄関ホールと写真の該当する箇所は平面図上では同様の形状をしていて、写真の身廊部には大きく切妻屋根がかかる。さらに、塔屋は写真で見ると間口が奥行よりも広い四角形をしている（図 9）。この点は図面と符合するのである。

教会堂の塔屋を含む南側の写真に見られる身廊の窓の位置、袖廊の張り出しならびにその窓の位置は創建時の図面に書き込まれているので、外観上では塔屋のみが設計変更になったと推察される。

次に堂内については、身廊から祭壇方向を見た写真があり、矩形の身廊の左（南側）に天井高を一段低くした部屋が映っている（図 10, 11, 12）。ここは図面上のオルガン室に当たる。他方、右手（北側）の壁の奥にはドアが見える。図面上ではベストリーへのドアだと判断でき、ドアの開閉も同じ外開きである。ただ、図面では祭壇の奥行は 8.5 尺（約 2.58 m）あるが、写真ではそれほどの奥行は感じられない。

ところで、堂内を撮影した3枚の写真から、格子を組んだ格天井であること、それは身廊の梁間方向に5枚数えられること、桁行方向には途中下り壁があることがわかる。この組格子は正方形なので、それを図面上に書き込んでみると、設計図の身廊部の天井に格子がぴたりと収まることわかった。

以上から身廊部は設計図と同じ規模で実施されたと判断でき、実施に際して、祭壇部は身廊から張り出す程度に変更されたことになる。ただ、写真には祭壇の中央部はアルコーブ状に外に張り出しているの、身廊から見ると狭いながらも奥行を感じさせる配慮がなされていたと考えられる。

### 3-3 復元に際しての推察

以上の考察の結果、設計図は玄関部と祭壇部を除いて図面通りに実施されたと判断した。また、写真から縦羽目板ならびに下見板の枚数が数えられるので、それを頼りに窓の位置を決定した。問題は、塔屋の高さ、そして祭壇の張り出しとそこにかかる屋根形状である。

まず、塔屋については、その四角錐の尖塔の高さが不明である。写真から、スレートと推察される屋根葺き材の枚数を数えることができた。その葺き方の形状から、スレートは正方形で45度に傾けた菱葺きであると判断した。塔屋の高さを実証的に検討するために、塔屋の梁間を三角形の底辺として、写真と同じ数のスレートを割り付けた。その割り付けた点から45度の線を引き、高さ方向のスレー

トの数を勘案して作図した。結果的に、ほぼ写真通りのスレートが葺かれた尖塔の面をつくることができた。作図から、尖塔のみの高さは約4.8mとなった。

次に祭壇部については写真(図12)からの判断となるが、側面に窓が写っているので半間程度の奥行とし、屋根については、設計図の玄関部の片流れの屋根を参考に、同様の差しかけ屋根とした。

以上の考察に基づいて復元図ならびに模型を製作した(図13, 14, 15)。

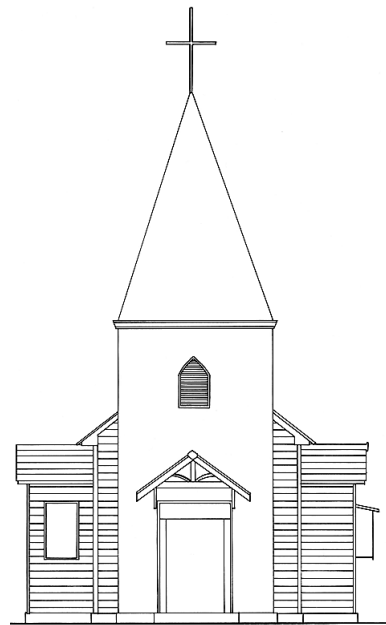


図13 創建時の教会堂東立面図(作図: 武藤茉莉)

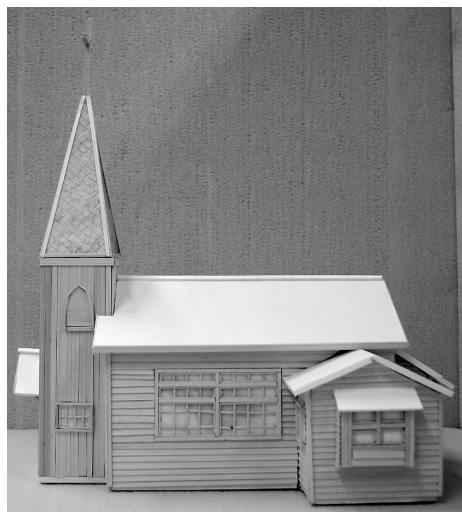


図14 創建時の復元模型(東面)



図15 創建時の復元模型(北面)

#### 4. 1964（昭和39）年建設の教会堂について

##### 4-1 資料並びに当初図面について

本考察に使用した資料は以下の通りである。

・「工事請負契約書」：見積書 および 添付図面「日本聖公会聖愛教会増築」（各縦42cm，横59cm）（日本聖公会東京地区事務所所蔵）

添付図面は，案内配置図，平面図・基礎伏・小屋伏，姿図・仕上表（いずれも縮尺=1/100），矩計・詳細（同1/20）の4枚で，設計は一級建築士事務所新和建設株式会社と記載。以下，同設計図を詳細に分析してみよう。

図面は，平面図のみが尺寸で設計され，その他の図面はmm単位で設計されている（図16，17，18）。教会堂の南西に3段の階段が付いた玄関へのアプローチがあり，玄関口に両開きの扉がつく。玄関から，板張りの廊下が北側の身廊（図面では聖堂と表記），応接室および西側に配された6

畳の和室（真壁）とトイレをつないでいる。身廊へは廊下から両開きの扉を通じて入る。その内部は大壁で縦板張りの腰壁が回り，東側に蹴上げ150mmの2段の聖壇を配する。聖壇の南にベストリーが付く。創建時の教会堂のような十字架状の平面形ではなく，その内部空間は大きな窓と相まって元の校長室の面影を残しているように見える。身廊と西側にある応接室は，3ヶ所の引違い戸により一体となる設計がなされている。その応接室の南側にキッチンが付く。

外観については，身廊と応接室に切妻造の大きな屋根がかかり，ベストリー部分と玄関・和室部分にそれぞれ小振りの切妻屋根が付く。玄関アプローチの部分は，比較的大きな庇が付く。外壁は，和室の南面とトイレ部分のみがモルタル仕上げで，それ以外はすべて下見板張りを採用している。なお，小屋組は，創建時と同様のキングポストラスである。

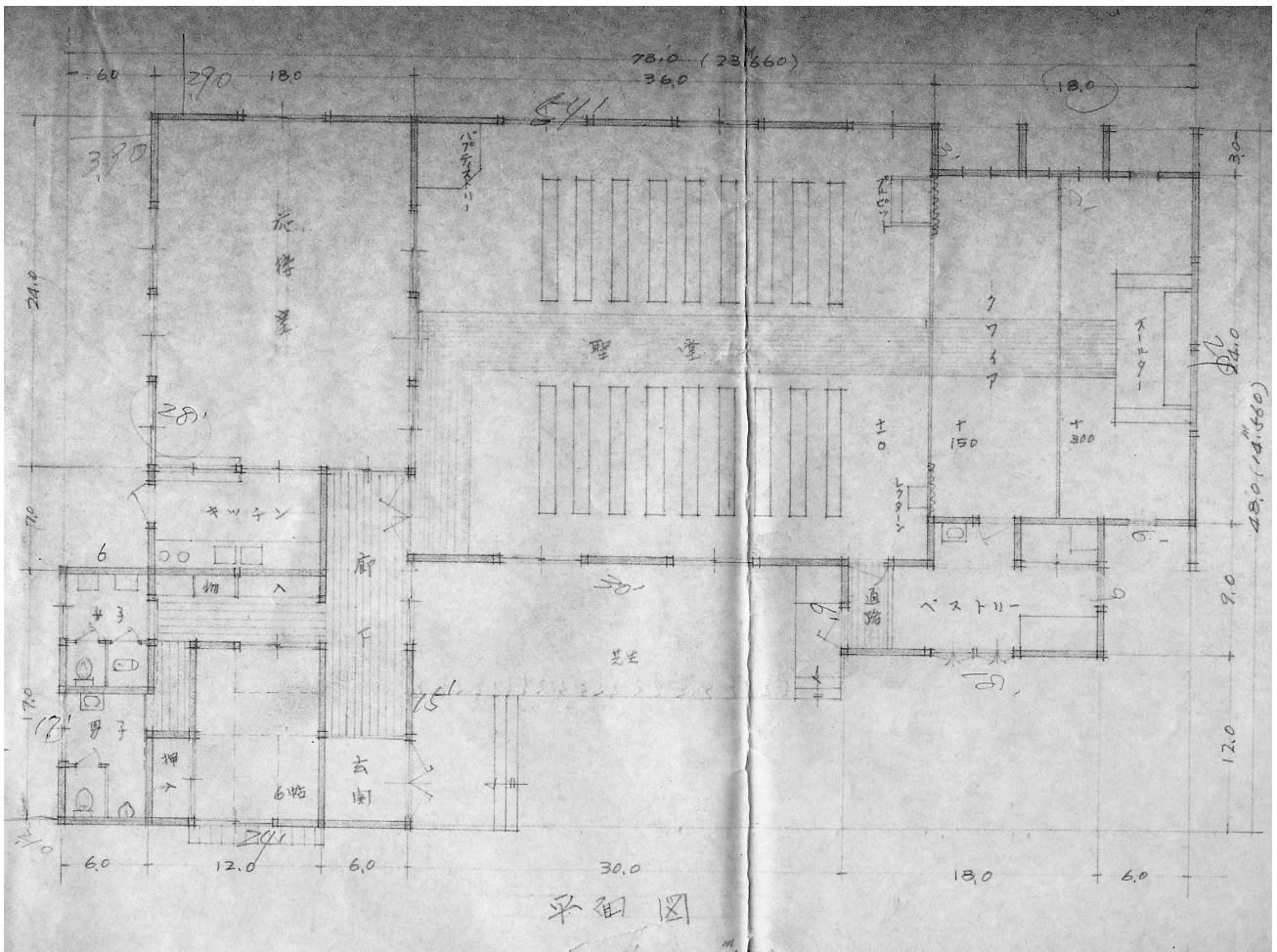


図16 1964年建設の教会堂平面図

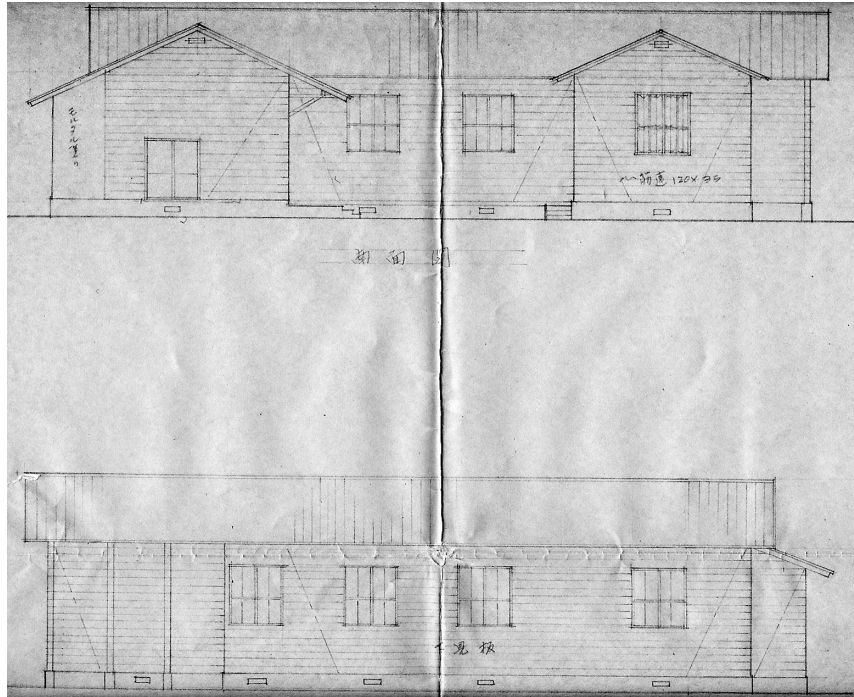


図 17 1964 年建設の教会堂・立面図

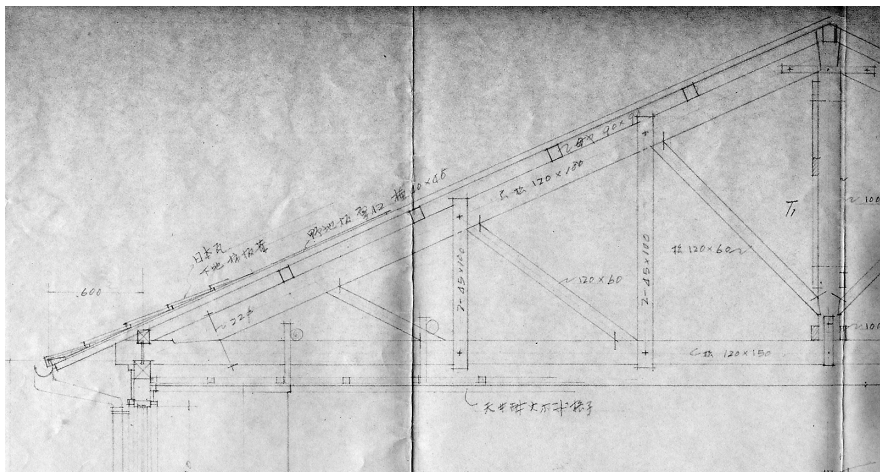


図 18 同・小屋組

#### 4-2 写真との照合

1964年の教会堂の図面は、当時の写真で確認できる範囲では施工とほぼ一致していた。しかし、写真では立面と内部の一部分しか確認できず、それ以降の図面についても教会堂に関してはごく概略的な図面しか残っていない。このことから、1964年の設計図を基本としながら、それ以後の年代の写真を使用して細部を考察していく。資料は以下の通りである。

- ・「昭和40年4月イースター（玄関）」、「昭和41年頃（ベストリー外部南側）」、「昭和38年頃（聖堂南側）」、「昭和49年4月イースター（聖壇）」、「昭和52年頃 礼拝（聖壇）」

(図19)、「昭和51年10月牧師館祝別当事（聖堂和室南側）」、「昭和51年10月 牧師館祝別（聖堂玄関外側・南面）」と題された7枚の写真（『百年史』掲載）

聖壇上の北側の壁の平面図には計3つの窓が描かれているが、当該の立面図には窓はなく下見板張りである。しかし、この部分については『百年史』掲載写真において3つの窓が確認できる（図19）。その形状から、これらの窓は「はめ殺し」と判断した。この窓と同じ形状をもつ窓は、聖壇の南面にも写真で確認できる。

次にベストリーの窓について、図面に書き込まれた窓下までの下見板の数が『百年史』に掲載された写真と同じで





図19 聖愛教会の聖壇 左手（北側）に3つの窓が見える

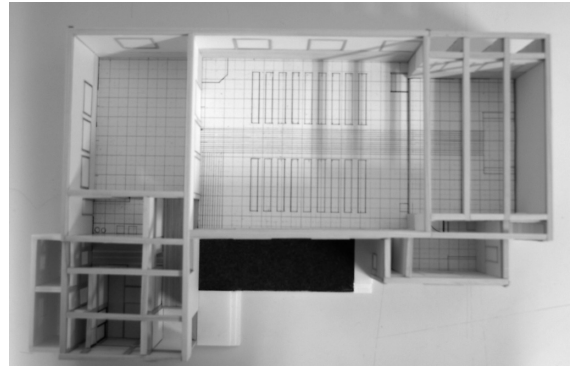


図20 1964年当時の復元模型

あることが分かった。

和室の南面は当時の立面図では下見板が書き込まれているが、それ以後に撮られた集合写真ではモルタル仕上げとなっていたので、この部分については設計変更がなされたのであろう。

窓回りに関しては、1964年当時は窓枠のみの仕上げであったが、それ以降の写真では窓台が確認されるので、小規模な改修があったことになる。

以上の考察に基づき、復元模型を製作した。縮尺については、現在の聖堂との共通点や相違点を明確にし、文化財的価値を考察するために1/50とした（図20、21）。

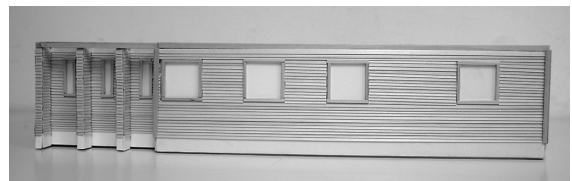


図21 同・北側立面

## 5. その後の増改築について

1964年以後の増改築については、教会堂の沿革史で述べているが、ここに一覧としてまとめておく。以下は、『聖愛の友』の記事からの抜粋である。

No.	日付(号)	記事内容	費用
23	1969年 9月	台風による屋根瓦の補修	
41	1971年 4月	教会堂玄関前のコンクリート打ち直し	
49	1973年 4月	放火によるボヤのため「ベストリーの修理, ガラス入れ」	6,859円
92	1978年 3月	瓦の修理完了	9,100円
110	1979年 8月	台所のガス, 水道の補修工事	200,000円
115	1980年 1月	台風被害による屋根瓦の修理	150,000円
116	1980年 2月	教会堂内の「化粧直し」(昨年10月)	773,925円
118	1980年 4月	鐘楼の完成	636,000円
120	1980年 6月	集会室・廊下・台所の内装工事	489,000円
131	1982年 5月	教会堂外壁補修(一昨年10月, 昨年5月の2回分ペンキ塗り代)	外壁塗装 582,000円
156	1983年 9, 10月	教会堂に換気扇 取り付け	5,200円
157	1983年 11月	トイレ便器改修	180,000円
194	1987年 11月	教会堂の「増改築の完成」	19,605,000円
214	1989年 8, 9月	教会堂外壁ペンキ塗り	600,000~700,000円程度
249	1992年 11月	教会堂外壁ペンキ塗り	1,756,150円
270	1994年 11月	床下補修工事	半額 1,003,220円
293	1997年 3月	祭壇の段差を小さくする工事及び正面の壁の修理	41,200円
315	1999年 5月	教会堂外壁ペンキ塗り	2,551,000円

No.	日付(号)	記事内容	費用
335	2001年8,9月	教会堂内フローリング工事	179,358円
341	2001年12月	11月15日実施の屋根の補修工事	291,900円
365	2004年5月	教会堂東側外壁ペンキ塗り	1,075,557円
395	2006年11月	堂内の床修理	131,754円

## 6. 教会堂の保存状態

建物の保存状態については、2006年に実測調査を行った風基建設の調査記録資料を参考とするほか、今回筆者らが実施した実地調査を踏まえて検討することにした。

まず、本教会堂の特徴となる下見板張りの外観については、集会室より西側は増改築のため1964年当時のものは全く残っていない(参照: 図4, 16)。次に北面については、計4つあった窓は小さなものに更新されているため、窓を含んだ部分の下見板は交換されている可能性がある(図22)。実際に窓まわりの下見板には不自然な継ぎはぎが確認できる。

さらに、教会堂東面ならびに聖壇南側ベストリーについては、このベストリーの上に鐘楼を増築した以外はその後改築が工事記録にないことから、同所の下見板はかつてのままであると考えられる(図23)。

他方、堂内については、主要な工事に際して各年代の図面が存在しているので、それらの建物の図面の寸法と1964年当時の図面のそれとを比較した。その結果、以下のような変更が認められた。まず、堂内については、祭壇北側にベストリーのための部屋が増築され、元の和室部分

は玄関ホールになった。また、かつての応接室(現集会室)と厨房は、1987年の増改築で変更された。さらに1997年の聖壇床の工事により、形状が変わったほか、身廊の床はほぼ更新されている。このように堂内については変更が著しいが、集会室、身廊、そして南側ベストリーを含む聖壇部分に限れば、その寸法は1964年当時と同じであった。なお、かつての玄関から各部屋に通じる廊下部分の床は一部残っていた。

次に小屋組について、ここでは改造の少ない集会室、身廊、そして聖壇(南側ベストリーを含む)を検証してみる。1964年の小屋伏図と実測調査の小屋伏図がほぼ同様であること、また矩計・詳細図についても補強材をのぞいて変更がないことが判明した。そのほかにも実測調査写真から、当該の小屋組の部材は明らかに古材であり、このことから教会堂の主要な小屋組は1964年、引いては1948年に建てられた立教小学校の部材である可能性が高いと考えられる。

ところで、屋根の瓦については、1964年の移築の際に立教小学校のものを使用し、その後数回の補修を行っているが1985年時点ではなおその大半が使用されていたことが、『聖愛の友』から判明した<sup>5)</sup>。さらに、1985年以降の工事は屋根の補修に止まっているため、立教小学校時代



図22 現在の聖愛教会の北面

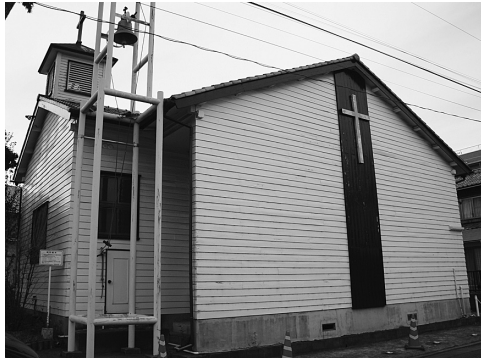


図 23 現在の聖愛教会の東面ならびに南側ベストリー

の屋根瓦がなお残存している可能性がある。

## 結 語

本稿では、聖愛教会について1949年の創建時ならびに1964年建設時の教会堂の復元的考察を行うとともに、現在の建物の保存状態を検討してきた。創建時の建物はその後の建物とは直接関係するものではないが、その下見板張りを伴う外観は、1964年当時の教会側にとって継承したいと思わせる意匠になり、引いてはその想いが下見板張りの校長室の再利用に結びついたのであるかもしれない。

聖愛教会の建物の歴史的意味は、この立教小学校の部材を再利用したところにある。ただ、学校とは用途の異なる教会堂に応用したので、どの程度までその校長室の姿が移築保存されていたのかは正直なところ謎であり<sup>6)</sup>、室内はすでに改修され昔の面影はない。しかしながら、外観意匠上の特徴である下見板張りは、教会堂の東面、北面（窓まわり以外）、そして南面の一部に残されていることは確実であり、小屋組も当初材の可能性はある。つまり、外観については1964年建設時の姿をよく残していると言える。

現時点で築46年となる聖愛教会は、文化財として一般的に原則としている築50年という観点からすれば、これからの文化財の候補ということになる。本教会堂については、西面を除く3面が道路から眺められるため、とくに東面と北面の外観は、昔日のイメージを損なうことなく、街区のランドマーク的な存在になっている。その意味から例えば国の登録有形文化財の登録基準に照らせば、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」に該当する可能性はある。

なお、近年下見板にはペンキ塗装がなされたため、古材と新材との差異化を目視で行うことは困難であったので、さらに厳密な保存状態の検討は今後の課題としたい。

## 謝 辞

本稿執筆のための調査に際して、日本聖公会東京地区司祭で聖愛教会管理牧師の鈴木裕二氏をはじめ聖愛教会の教会員の皆様から資料の提供をいただいた。また、本稿の基盤をなす調査研究には、調査メンバーの木村知世さんと片倉真里さんの協力があった。併せてここに記して感謝申し上げる。

## 註

- 1) 本教会の沿革史については、日本聖公会東京地区聖愛教会百年史編集委員会（編）『聖愛教会百年史 聖愛の友』（発行、聖愛教会、1989年）を参照した。以下、本文中に用いるときは、『百年史』と略す。
- 2) 『聖愛の友』（No. 29, 1970年3月発行）これは聖愛教会が毎月発行している教会だよりで、100号ごとに冊子化して聖愛教会に保管されている。
- 3) このときの工事請負契約書が存在し、それによると移築工事は300万円であった。
- 4) 『聖愛の友』（No. 51, 1973年6月発行）立教小学校については、『昭和42年立教小学校要覧』、『昭和27年立教小学校要覧』があり、取り壊す以前の立教小学校の全校舎全面図と施設概要の記載がある。また『立教小学校三十年史』（1977年）には、校舎の一部の写真が掲載されている。さらに酒向誠著『あなたまかせの男の旅路』（自費出版、1980年）に立教小学校の解体についての話が掲載されている。
- 5) 『聖愛の友』（No. 172, 1985年4月発行「近年の建築・改築・営繕と今後の計画について」）
- 6) 立教小学校は、清水組（現清水建設）によって池袋の地に建てられた。清水建設には図面をはじめとする資料は存在しなかった。また、立教小学校関連の文献（註4）には校長室そのものの写真は掲載されていなかった。

## 図版出典

- 図1, 3, 5, 22, 23 撮影および作図（堀内正昭）  
 図2, 4 風基建設株式会社作成（聖愛教会所蔵）  
 図6, 7, 16, 17, 18 日本聖公会東京地区事務所所蔵  
 図8, 10, 11, 12 聖愛教会所蔵  
 図9, 19 『聖愛教会百年史』（前掲書）  
 図13 作図（武藤茉莉）  
 図14, 15, 20, 21 堀内研究室所蔵

（ほりうち まさあき 環境デザイン学科）  
 （ぶとう まり 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年）